6 りんごの何を食べるのか

長洲一二

「お百姓さんのご苦労を思え」などと、道徳家めいたことを説くつもりはない。ただ、一つぶの米も大事に味わう心は、父祖伝来私たちのなかにあった。それは失っていいものではないと思う。

これも知人に教えられた「りんごの食べ方」という話である。――「りんごを食べるとき、信州*や青森の、冬の雪や春の花、夏の太陽の照り返し、秋口の雨や風、そういうものを、その一つのりんごに味わうのが、ほんとうの食べ方だ。それなのに今多くの人は、ブタのようにただ大食して、なんにも味わったりしない。つまらない、貧相*な食べ方だ」

もうひとつ、これも人に教えられた、ある母親の話である。――子どもが、母親愛用の電気スタンドをこわした。叱ったら、「ごめん」とも言わずに答えた。「ケチだなあ、お母さん。こんな中古、三千円も出せば、ずっといいのが買えるよ」。母親の言うには、そのスタンドは結婚のとき父親といっしょに買って、もう十数年も使ってきたものだ、その長い生活がこめられている、新型の方が便利とか、三千円か一万円かとかいうものではないのに、それがわからぬのは悲しいと。

ひとつのりんごでも、それで「一体何を食べるのか」人によってたいへん違う。一個の電気スタンドでも、人はそれで「何を使うのか」は、さまざまだ。この母親は、たんに何ルク*スかの明るさだけでなく、十何年かの家庭の思い出もまた使っているのだ。

私は、これは単なる「倹約*」ということとは違うと思う。まして「ケチ」なんかとは全然違う。むしろ逆だ。「ぜいたく」な、と言ってわるければ「豊かな」食べ方、使い方と見ていいのではないか。今私たちは（私自身も含めて）、こうしたぜいたくさや豊かさを、なくしてしまったのではないか。

何も味わわずに、ガツガツたくさん食べても、それはぜいたくでも豊かでもない。無感動、無関心に、やたらに使っては捨て、使っては捨てしても、それはかえって貧しくいやしいと言えそうである。ひとつのりんご、一個の中古電気スタンドでも、食べ方、使い方次第で、すごく豊かになりうる。食べる量、使う量、その物量の多寡*だけで、ぜいたくさや豊かさがきまるわけではない。茂吉*の短歌に、

ただひとつ惜しみておきし白桃のゆたけきをわれは食ひおはりたり

というのがあった。何と豪奢*なまでに豊かな感じではないか。

むろん、物量が少ない方がいいなどと言っているのではない。ぜいたく自体がいいと言うのでもない。いやしいぜいたくもあるし、美しいぜいたくもある、冷たいケチもあるし、暖かい倹約もあると言いたいのである。

私は、むだ使いはよくないと思うし、またケチにもなりたくない。それは、ともに美しく充実した豊かさを欠いているからだ。

たとえば私たちはこのごろ、季節感を失ってきた。日本の四季の移り変わりは、たいへんな豊かさ、ぜいたくさだと私は思う。だから私は四季を失いたくない。「春は藤波を見る、夏は郭公*を聞く、秋はひぐらしの声、冬は雪をあはれぶ」（方丈記*）といった美しいぜいたくさを、私は味わいつづけたいと思う。

だが私たちは、こうした豊かさを失ってしまったようだ。むしろ私たちは、四季の変化をなくすことに熱中している。そしてそれを、進歩、発展と考えているようだ。その意味では私たちの欲求自体が、だんだん貧相になり、ぜいたくさを失くしてきているとも言えるようだ。

（ＰＨＰ研究所刊「ＰＨＰ」昭和四十八年八月号による）

豊かな心が豊かさをつくる。（草柳大蔵）

信州
信濃の国の別称。長野県。

貧相
みすぼらしい。

ルクス
明るさの単位。

倹約
節約。むだをしないこと。

多寡
多いことと少ないこと。

茂吉
斎藤茂吉。一八八二年山形県生まれ。歌人、精神科医。雑誌「アララギ」を編集。一九五三年没。

豪奢
ぜいたくで、はでなこと。

方丈記
鴨長明著。鎌倉時代初期の随筆。